富士山国際化の前史—江戸期の言説を中心に—

ロナルド・トビ

「日本の象徴」として永く国民に親しまれてきた富士山は、2013年に世界遺産に登録されて、「世界の富士山」になった。その国際化が新しい段階に達したといって、過言ではないだろう。だが、富士山が地質学・地理学的な「モノ」から、益々広い範囲におよび、文化的アイコンへの変容は、その歴史が長い。

『万葉集』以来、富士山の意義を問う文脈が古くから認められている。「天地(あめつち)の　分(わか)れし時」（山部赤人）、この世と異界との接点として謳われてよりこのかた、その意義を世界的なスケールに読み解く、恒久かつ多面的な言説が形成されたのは、江戸初期から本格化したといえよう。時代をつうじて『古今和歌集』や『竹取物語』、謡曲の『富士山』なども、富士山を取上げる文学・絵画作品は、数知らずの点数に上るであろう。ところが、王朝・中世文学の「富士山」は、都（朝廷）を中心に放射状に広がりながら、次第に希薄化してゆくと考えられていた。代表的なのは『伊勢物語』の東下りの段である。都人にとって、富士山を歌枕としてじょ「知識」があるにしても、その形姿(すがた)を知る人は少なく、「その山ハ、ここにたとへば、比叡(ひえ)の山を二十(はたち)ばかり重ねあげたらむほどして、なりは塩尻のやうになむありける」と、富嶽を自分の目で見たことのない都日とに、その形姿を身近な比叡山に喩えるしかなかった。

富士山が日本全域にわたり、各地の人に親しまれるようになったのは、江戸期に入って、列島各地の人々が、参勤交代をはじめ、商売、寺社参詣なとの「旅の時代」になってからであり、その結果こうした「富嶽ディスクール」は、近世の文学、口承文化、絵画、版画、芸能、ファッションや工芸など、表象文化の各面にわたり、工夫を凝らした広範囲の言説へと発展した。このディスクールの要に、富士山が日本を代表するナショナル・シンボルへと昇格された事実があり、本報告はそのプロセスを追跡するものである。このプロセスを、江戸期を中心に検討することとする。

このディスクールに、幾つかのベクトルがみられ、それぞれが「日本」と「異国」、「異国人」との繋がりのありようを、イデオロギーとして編み出したことは、重要な出来事である。

そのベクトルの一つは、富士山が異国からも見えており、その異国と日本との関係のあり方を裏づけるものである。寛永年間に、亡き殿・加藤清正の美談を綴った『清正高麗陣覚書』によると、文禄の役の折に清正が「兀良哈」（豆満江流域）に侵攻して、凱旋の際、豆満江河口近くの済州浦(ソスラ)というところから、「天霽(はれ)れば、富士山甚だ近く見ゆるべし」と、現地に永く逗留した松前の人に教えられた、とある。富士山がいくら高く、天がいくら霽れても、一千キロ以上も遠い大陸の地から見えることはむろん、不可能であるが、この逸話がいつの間にか、広く日本の人々に信じられ、さらに着色されていくこと、富士山の見える範囲が広がっていくことを、取上げる予定である。

富士山がその遠く離れた戦地から見えるということは、幾つかのメッセージが秘められていると思われる。まずは、日本一の霊山が見える範囲は、その霊験が及ぶという意味と、従って、清正

の勝利を見守るという意味が、暗黙のうちに含まれている、と考える。（秀吉の朝鮮侵略は、勝ち軍どころか、負け戦であったことは間違いないが、江戸期のディスクールでは、勝ち軍と見る文脈が濃厚であった。）清正の「富嶽遠望奇譚」は、さらに、松下見林、寺島良安、新井白石などによって、「学問的な事実」として認められるようになり、富士山が遠くまで見える「コト」は、多くの人に受け入れられるようになった。この逸話を清正の「富嶽遠望奇譚」と呼ぶことにする。

同時に、三国一の名山富士が遠く異国までも見えるとなると、その霊験に魅せられて、異国の人々を日本へ呼び寄せることも、当然に考えられるようにもなった。寛文九年（一六六九）版行の『犬百人一首』には、原作の第二十六首、貞信公の「をぐらやま」を見立てて、「唐人公」が率いる唐人一行（右図）が富士山を街道から眺めて、「ふじの山、唐のものども、心あらば、今ひと旅の、深雪めでなん」、と詠んだ。趣旨は、富士山が好意の異国人を、日本へと誘う魅力があることを示すスタンスをとる。

後に、東海道と行き交う朝鮮通信使が来日する度毎に、朝鮮人が富士山を通ることになる、朝鮮人が富嶽に見せられてきたディスクールも生まれる。の通信使を描いたガイドブックの一つ『朝鮮人大行列記』（右・寛延元・一七四八年）は、麓をとおる朝鮮人行列の一人が、富士山を見て「ふじの山ハ三ごく一の山じゃ」という台詞が書き入れられており、世界で最も美しい山であるコトを、作者が異国人に認めさせている。後年、葛飾北斎も、『富嶽百景』（天保四）に、富士山に魅せられている朝鮮通信使一行を想像した様子を描いた「来朝の不二」（左）を描いている。朝鮮人全員の視線が富士山へと光れており、あたかも富士参詣のための来日とも連想されよう。

実は、北斎や『朝鮮人大行列記』が朝鮮通信使の外交行列を、富士山と付け合せて描くことは、一七世紀後半から芽生えはじめた絵画のテーマである。モチーフとして徐々に多様化していったことも、鍔などの金具（右）、兜の蒔絵、陶器のデッサンとして利用されるようにもなった。朝鮮使節は、あたかも「三国一の山」を愛でることが来日の目的であるかのように描くディスクールである。

富士山は、このように好意の心をもつ異邦人を日本へと誘導する魅力もあれば、日本を敵意をもつ異邦人から守り、彼らを跳ね除ける、一種の守護神でもあったというディスクールも、並行して構築されるようになった。平賀源内の『風流志導軒伝』（宝暦三年）という戯作は、富士山の絶賛を、主人公の浅之進から語られると、清の康熙帝がその山が欲しくなり、ただちに職人を集め、「紙と糊」を授け、「不二山を張りぬきにして」、それに基づいて清国にも富士山を築くよう、「大舩三十万艘」の船団に、紙や糊、そして職人を日本へ遣わす。乾隆帝

の経略を察知した住吉大明神ら、日本の神々が、富士山の頂上で「神集い」をなして、大船団を海上で拒むよう、蒙古襲来を止めた神風に倣って、風雨の神を送り、船団を悉く沈めて、富嶽―ひいては日本―を守る。こうして、富士山が悪意の来寇を跳ね除ける霊験を帯びている「事実」を示す。この異国退治の霊験に依拠するディスクールは、幕末の尊皇攘夷論に取り入れられ、絵本やかわら版などに登場するようになる。

富士山を日本の守護神としてのシンボルとして昂揚させたのが、高まった、益々迫ってくるロシアはじめ、西洋諸国からの脅威感が増す一八世紀後半からであった。そのころから、とりわけ加藤清正の富嶽遠望奇譚が、の寺沢昌次『絵本武勇大閤記』（寛政二年刊）、**岡田玉山**『絵本太閤記』（寛政九→右図）や、秋里籬島『**絵本朝鮮軍記**』（**寛政十二**）などに、清正の富嶽遠望奇譚が、文章で語られるだけでなく、はじめて挿絵として絵がかれるようになり、広く可視化した形で流布したことが、富嶽が何所からでも見え、日本を守るシンボルとして、新しい段階に進んだといえよう。

これらの絵本が触媒として、清正の富嶽遠望奇譚が、文政期から摺物や錦絵の、さらに神社に奉納される大絵馬（文政十三年）の画題ともなる。これらの場合、書き入れも題字もなく、絵だけであったので、清正が富嶽を海を越えて異国の地から眺めたというこの逸話が、ついに日本各地の庶民が認識するようになったといえよう。歌川国芳「佐藤正清」（嘉永二・右）や歌川芳虎「天安年中佐藤主計助政清渤海国征戦の日海岸より芙蓉峯を見る図」（万延元・左）が代表的な作品であろう。ペリー来航以降の、「内憂外患」・「尊皇攘夷」の熱狂が高まる幕末にあって、清正に異国退治の願いを託したであろう。

同じ万延元年に、イギリス公使のオールコックが、条約に、外交官の何所へでも行く権利が盛り込まれており、その権利を実行するつもりで、幕府に対し、富嶽を登りたいと願い出ることにした。それを、恐らくオールコック一行の安全を案じてであっただろうが、幕府が猛反対したようだが、ついにその年の七月に、オールコックら一行が江戸から富士山へ下向し、頂上まで登った。が、下山途中から風雨にあったことがあり、それを早くも、天狗と化した山の神がその風雨を呼び起こして、異国人たちを山から吹き降ろした、というスタンスの（二通りの）かわら版として、全国に流布するようになり、さらに富士山が「攘夷論」を実行する守護神として動員された。

また近代になって、日本を代表するシンボルとしての富士山が、その生命を延ばした。その一例として、昭和十四年のニューヨーク万国博覧会における日本館は、達磨峠から展望した富嶽の写真を、幅 33 ㍍に引き伸ばした大画面を、日本館の壁を飾ったことは、日本＝富士山という言説を全世界にアピールした。

なお、同時に、外国人も富士山を愛でる言説も、並行していることは、見逃せない。上でみた『犬百人一首』の一丁は恐らく、来日の朝鮮通信使からヒントを得て描かれたであろうが、朝鮮通信使の人々が富士山を絵で描いたり、詩で詠んだりすることは、多々あったことは間違いない。また、エンゲルベルト・ケンペルなど、来日のヨーロッパ人も、富士山の優美な姿を見逃すことなく、爾後、富士山に言及しない日本旅行記に欠かせない一節となった。

近現代においても、外国人が富士山を日本のシンボルとして利用することが多々ある。一例のみに言及すれば、バブル経済の最高潮に対して、日本経済恐怖が欧米にはびこったときに、フォーチューン紙国際版が、「日本恐怖・憎悪」の特集を組み、表紙絵として、幅狭くなった太平洋の彼方に聳える富士山を描き、そこから虎かライオンのような捕食性猫科に化した日本車が、牙を剥き出しに、アメリカを襲いかかろうとしている図柄である。